Japanese Association for Religious Studies

や宗教対立をもたらすと考えられ、宗教は、私的領域に入れられるべきものと捉えられる。それに対し、ガーンディーは、個々人が自身の宗教（*swadharma*）を固く遵守しつつ、政治（*rājnīti*）に参与していくことが、不殺生（*ahiṃsā*）に基づく「寛容（*sahiṣṇutā*）」の精神を醸成するために不可欠であるという思想を抱いていた。本発表では、ラージチャンドラの「本質宗教（*niścayadharma*）」と「実践宗教（*vyavahāradharma*）」という二つの概念における、「慈悲（*dayā*）」、「魂（*ātman*）」、「梵行（*brahmacarya*）」の位置づけを検討し、それらが、ガーンディーにおける宗教政治の思想的構造と密接な関係があったことを明らかにする。

北インド・ゴーガー神信仰の位置づけをめぐる一考察

拓　徹

北インドのゴーガーは、十一世紀に現ラージャスターン州北部で実在したチョウハーン族のヒーローを基にした、勇士（vir）型の神格である。比較的無名ながら、ラージャスターン州とパンジャーブ州を中心に東はウッタル・プラデーシュ州西部、南はグジャラート州、北はパキスタンのペシャワールに至る広範な地域において、ヒンドゥー・ムスリム両者の民衆から蛇除けの神として信仰されている。ゴーガーのヒンドゥー・ムスリムにまたがる性格は、一般にヒンドゥーの神とされながら、ラージャスターン州北部にあるその墓廟がムスリムのダルガー（聖者廟）に似ている点、墓廟に仕える祭祀者がムスリムである点、八月に行われるその祭りにおいて信者が鉄の鎖で自らを打つ行為がシーア派ムスリムのそれに酷似している点などにあらわれている。

ゴーガーのこうした性格の多くは、北西から侵入するムスリムとの文化的混交を繰り返した北インド中世の事情に由来している。ゴーガー墓廟で祭祀を務めるムスリム集団（Qyam Khani）はヒンドゥーのチョウハーン族の一部が十四世紀以降に改宗したものであり、またゴーガー伝説が初めて書き表されたのは十六世紀のことである。以来ゴーガーの説話には必ずヒンドゥー・ナート派の伝説的開祖ゴーラクナートが登場するが、スーフィズムの要素を併せ持つこのナート派をはじめ、中世インドの宗教（バクティ運動など）はヒンドゥー・ムスリムの両者にまたがる傾向を持っていた。

ゴーガー伝説はその後も口承説話のかたちで語り（歌い）継がれて行くが、例えば十九世紀パンジャーブの口承説話では、ゴーラクナートやパーンチ・ピールといったヒンドゥー・ムスリム混交的な要素が大きな位置を占め、その宗派の違いを超えた人気の土台となっていた。中世的なヒンドゥー・ムスリム混交の文化は近世に至っても口承説話の中にその姿をとどめ、これがゴーガー信仰の基盤ともなっていたわけである。現代のDVDに収録されたものに至るまで、ゴーガーの物語はおしなべて民謡の形式で語られている。

ゴーガー信仰のシーア派的な側面については、十八世紀に成立したシーア派のアワド藩王国の影響も考えられるが、それ以上に北インド民衆レベルにおけるフセイン信仰の重要性が考えられる。中世ラージャスターン文学の巨匠イーサルダース

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

(Bārhat Īsardās, 1538-1618) のバクティ詩がヒンドゥーの神々と並んでフセインをも称えたように、フセインの殉教伝説は北インドでひろく知られ信仰の対象となっていたと思われる。十九世紀に頂点に達したウルドゥー詩の形式マルシアはフセイン伝説（カルバラーの戦い）の描写に特化した文学ジャンルだが、これが当時の北インドではシーア派ムスリムに限らず広く行われたジャンルだったことも想起されるべきだろう。

まとめると、ゴーガーは従来の学術研究では、十九世紀以降に整ったヒンドゥー教のパンテオンに入らない「ローカル」で「小さな」神とされてきた。しかし右のようなその成立史を概観すると、ゴーガー信仰は「非体系的でシンクレティックな民間信仰」というよりはむしろ、北インドの特定の時代とパラダイムを体現する信仰と考えた方がよさそうである。ただ、ゴーガー信仰は中世から近世の長期間にわたって醸成され、地理的にも非常な広範囲をカバーしているため、その現状は複雑に複層化している。これが、そのまとまった研究がこれまで行われてこなかった原因と思われる。

諸宗教間対話は進んでいるか
――教会の保守化傾向を考える――

髙橋　勝幸

今年は、第二ヴァチカン公会議開催から五〇年の節目を迎える。これを機会に「開かれた教会」として進められてきた「宗教間対話」の進捗状況を再検討して見た。

キリシタン史における日本巡察師ヴァリニャーノの「適応主義布教方針」が、日本や中国の布教に大きな成果をあげていたことに着目し、その霊性が三五〇年の時を経て第二ヴァチカン公会議の『キリスト教以外の諸宗教に対する態度についての宣言』において結実した。この精神によって神学者カール・ラーナーが指導的役割を果し「開かれた教会」は従来の「教会の外に救いはない」としてきた態度から一八〇度の転換となった。多くの人に希望を与え、諸宗教との対話、相互交流等によって明るい展望を持てるようになった。　しかし、五〇年経っても期待した成果は得られず、グローバル化・世俗化の流れは止められず、教義や儀式を重んじる既成宗教離れは加速し、若者の教会離れは顕著になってきた。ニューエイジ等に代表されるように簡略化された新宗教が流行るようになってきた。現状に失望し、宗教の厳格さを求める揺り戻しから再び保守化傾向が強まってきた。

諸宗教も同じ悩みを持っていると思うが、教会を例に取ると危機感から保守的にトリエント公会議以来の引き締めを計った厳しい規則を当てはめて原理主義的な旧習を懐かしむ勢力が盛り返してきているようである。保守派は既に公会議直後から『教会法典』の改正等で教導職の「不謬性」等の地歩を着実に固めていた。従って「キリスト教的自由」は位階性の「聖なる源泉」「聖なる支配」の中で、この「聖なる支配」をキリスト教的な真の自由と理解し、受け入れることになる。反抗する自由は認められていないことになる。「キリスト教的自由」は従順の中でのみ満たされるというもので、教導職の絶対的な権力の行使に従わなければならないことに変りはなくなった。

NII-Electronic Library Service